

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
平成 30 年度 第1回研究発表会「動詞・形容詞(琉球諸語)」
「宮古語の動詞と形容詞－方言の分布と歴史的な変遷－」
セリック・ケナン(国立国語研究所)
国立国語研究所 平成 30 年 6 月 17 日

1. はじめに

本発表では、宮古語の動詞と形容詞を、共時的なバリエーションと歴史的な観点から見ていく。個別の方言は必ずしも例外のないきれいな体系を持っているとは限らず、歴史変化の痕跡を散発的に残している。このため、一つもしくは少数の方言のみを見た場合、記述における一般化の妥当性や変化の方向性がその方言内だけで決められないことも多い。ここでは、宮古語において十分な数・種類の方言を比較し、共通祖先(祖語)からどのように変化したのかを考えることにより、諸方言の動詞・形容詞のバリエーションの在り方を記述する。その中で、①共時的なバリエーションに着目することにより、調査がしやすくなり、より精密な記述ができる ②歴史的な変遷を知ることにより、共時的な体系のあり方に対する理解を深めることができ、より適切な記述ができる ことを示していく。

本発表では、方言の比較によって再建できる最も古い状態を「中古宮古語」と呼ぶことにする。これは、仮定される宮古祖語に比べると、いくらか新しい特徴を持つと考えられるが、定義上、どの方言のどの形式も、「中古宮古語」の段階を経ている¹。本発表では宮古祖語について詳細には扱わず、この中古宮古語からの変化を見ることとする。

2. 動詞

2.1. 拡張語幹と動詞クラス

宮古語では、動詞の語根に直接付く接辞(1)と、拡張分節(Thematic segment)を経て付く接辞がある(2)(3)。拡張分節は、動詞の語根に付き、拡張語幹(Thematic stem)を形成する。拡張分節自体はなんらかの機能を持っているとは考えられておらず、単に付く接辞によって現れるのである。

(1) kak-i 「書く-IMP」

(2) kak-i-tti 「書く-THM-SEQ」

(3) kak-a-n 「書く-THM-NEG」

宮古語のどの方言でも、対応している 2 つの活用クラスが認められる(伊良部長浜:Shimoji 2018、大神:Pellard 2009、狩俣:衣畑・林 2013、池間西原:林 2013、下地皆愛:セリック 2018、下地来間:杉村 2003)。それぞれの動詞クラスは、付く接辞の形式(4)(5)や拡張語幹の数と形式などが異なる(6)(7)。クラス 1(以下 CL1)は古典日本語の四段・ラ変動詞に、クラス 2(以下 CL2)は一段・二段動詞に対応している。それに加えて、折衷的な活用パターンを示す 1 つの動詞と、いずれのクラスにも属さない不規則的な動詞もある(表

¹ 祖語から分岐したすべての方言で同じ変化が並行的に起こったならば、比較方法によって祖語の正しい姿を再建することができない。例えば、*ura に遡る二人称の代名詞が宮古のどの方言にも vva ~ uva という形式を示しているが、これは宮古祖語の形式であることが考えにくい。なぜならば、多良間島の古謡においては、ura という形式が伝わっているからである。*vva は中古宮古語の形式であり、*ura (又は ura) は宮古祖語の形式である。

1)。

- (4) CL1 kak-ama- 「書く-HON」、kak-a(r)i- 「書く-PASS/POT」
 (5) CL2 idi-sama- 「出る-HON」、idi-ra(r)i- 「出る-PASS/POT」
 (6) CL1 kak-ɣ-, kak-i-, kak-a- (下地皆愛方言)
 (7) CL2 id-i-, id-u-, id-iri-, id-iru- (下地皆愛方言)

表 1 宮古語の動詞クラスと古典日本語との対応

クラス	古典日本語	動詞数*	例
クラス 1	四段	1500+	kak- 「書く」、kug- 「漕ぐ」
クラス 1(不規則)	ラ変	5	ar- 「ある」、(b)ur- 「おる」
クラス 2	一段・二段	600+	idi- 「出る」、uti- 「落ちる」
折衷的	ナ変	1	sɯn- 「死ぬ」
不規則的	サ変、カ変	2	(a)s- 「する」、k- 「来る」

*渡久山氏の辞書原稿(約 12400 項目、多良間仲筋方言)に基づく。

2.1.1. クラス 1 の拡張語幹

クラス 1 の動詞は、本来 4 つの拡張語幹を作りえたと考えられるが、実際には 3 つである。規則的な音韻変化によって、*-u- と *-i- に特徴づけられていた拡張語幹が、歯茎音 -t-, -s-, -r- や -m- で終わる動詞の場合、同音となり、合流したと思われる(表 2)。残りの動詞は、この 2 つの語幹が揺れ始め、片一方の語幹が優勢となっていったと考えられる。その結果、多くの方言では、もう 1 つの語幹が駆逐されたのである(本永 1976、かりまた 1999、セリック・林 2017)。ただし、優勢となった語幹、または駆逐された語幹などは、方言や動詞の語根末音によって異なっている。多良間方言や宮古本島の多くの方言では、-b-, -k-, -g- で終わる動詞は、A 語幹(連体形対応)を失っており、-P- に終わる動詞(つまり母音語根動詞)は、B 語幹(連用形由来)が名詞形以外に使われなくなっている(表 3、表 4)。

表 2 中古宮古語のクラス 1 動詞の拡張語幹

	A (連体形対応)	B (連用形対応)	C (已然形対応)	D (未然形対応)
歯茎音 (-t-, -s-, -r-)	budur-ɾ (<*u)	budur-ɾ (<*i)	budur-i-	budur-a-
-m-	jum-∅ (<*u)	jum-∅ (<*i)	jum-i-	jum-a-
非歯茎音 (-P-, -b-, -k-, -g-)	tub-ɥ (<*u)	tub-ɾ (<*i)	tub-i-	tub-a-

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
平成 30 年度 第1回研究発表会「動詞・形容詞(琉球諸語)」

表 3 クラス 1 動詞の拡張語幹(下地皆愛方言)

語根末分節	基本語幹	i語幹	a語幹	名詞形
-s-, -t-, -r-	budu-ɾ-	budur-i-	budur-a-	基本語幹と同じ
-b-, -k-, -g-	tub-ɾ-	tub-i-	tub-a-	基本語幹と同じ
-tts-, -dz- < *-r-	fundz-ɾ-	fundz-i-	fundz-a-	基本語幹と同じ
-ff- < *-r-	tsuff-u-	tsuff-i-	tsuff-a-	基本語幹と同じ
-vv- < *-r-	tav-∅-	tavv-i-	tavv-a-	基本語幹と同じ
-zz- < *-r-	paɪ-∅-	pazz-i-	pazz-a-	基本語幹と同じ
-m-	jum-∅-	jum-i-	jum-a-	基本語幹と同じ
母音語幹 (< *-P-)	niga-u- [nigoo]	niga-i-	niga-a-	niga-ɾ (基本語幹も可)

表 4 クラス 1 動詞の拡張語幹(多良間仲筋方言)

語根末分節	基本語幹	i語幹	a語幹	名詞形
-s-, -t-	mutɕ-ɾ-	mut-i-	mut-a-	基本語幹と同じ
-b-, -k-, -g-	tub-ɾ-	tub-i-	tub-a-	基本語幹と同じ
-tts-, -ddz- < *-r-	utts-ɾ-	uttɕ-i-	uttɕ-a-	基本語幹と同じ
-vv-, -ff-	tavv-ɾ-	tavv-i-	tavv-a-	基本語幹と同じ
-r-	budu ∅-	budur-i-	budur-a-	基本語幹と同じ
-zz-	ɾ-∅-	zz-i-	zz-a-	基本語幹と同じ
-m-	jum-∅-	jum-i-	jum-a-	基本語幹と同じ
母音語幹 (< *-P-)	niga-u- [niguu]	niga-i- [nigee]	niga-a-	niga-ɾ (基本語幹も可)

2.1.2. クラス 2 の拡張語幹

クラス 2 動詞の拡張語幹は表 5 の通りである。表の例で確認できるように、中古宮古語においては、これらの動詞を「母音語幹動詞」として分析することが可能である。現在の方言を見ると、未然形において-u- を示す方言(狩俣?, 下地諸方言、砂川、保良ぼど)と、それを示さない方言(池間諸方言、平良、多良間など)がある。ただし、宮古祖語の段階においては -u- を再建するべきだと考えられている(Pellard 2009, p.337)。このシナリオでは、いくつかの方言で、散発的な変化によって -u- が失われたと推測される。実際、-u- が消えていったと考えられる根拠は次の通りである。まず、八重山諸方言にも二段動詞に対応している動詞の未然形に -u- が広く見られる²(竹富:前田 2013、石垣宮良:伊豆山 2002、石垣川平:法政大学沖縄文化研究所 1975、黒島:原田 2016 など)。次に、-u- が見られない宮古の方言でも、-u- があったという報告がある(大神方言:Pellard 2009 では、クラス 2 動詞は -u- を示さないが、法政大学沖縄文化研究所 1977 p.136 では、「落ちる」の未然形に対して、uti ~ utu という形式が収録されている)。

² 与那国や白保(中川、タイラー、田窪 2015)のように、一段・二段動詞対応動詞が完全にクラス 1 に変わっている方言の場合は、本来 -u- があったかどうかを知るすべはない。

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
平成 30 年度 第1回研究発表会「動詞・形容詞(琉球諸語)」

表 5 中古宮古のクラス 2 動詞の拡張語幹

語幹	接辞・拡張分節	「出る」	「覚える」
A (連体形対応)	-r ₁	idi-r ₁	ubui-r ₁
B (連用形対応)	-ø-	idi-ø-	ubui-ø-
C (已然形対応)	-ri-	idi-ri-	ubui-ri-
D (未然形)	-u-	idi-u- [id ^h u]	ubui-u- [ubuiju]

一部の方言では、拡張分節の -u- が姿を眩ました³。これらの方言では、クラス 2 動詞を母音動詞として分析することができる。それと反対に、-u- を残している方言が多く見られるが、ガイドが落ちている (idi-u- > id-u-) 結果、クラス 2 動詞を母音語幹動詞として分析することができない。また、これとは別の変化として、連体形対応形が廃れていき、基本語幹(連用形対応形)に置き換えられる傾向がよく見られる。例えば、下地皆愛方言では、表 5 の形式 A に対応している形が完全になくなっており、命令否定形 Verb-nna < Verb-r₁-na にしかその名残を見出すことができない。最後に、-ri- に対して -ru- が対応している方言が見られる。

表 6 平良方言のクラス 2 動詞(母音語幹動詞)

	拡張分節	「出る」	「覚える」
語根	母音終わり	idi-	ubui-
基本語幹	-ø-	idi-ø-	ubui-ø-
r ₁ 語幹	-r ₁ -	idi-r ₁ -	ubui-r ₁ -
ri 語幹	-ri-	idi-ri-	ubui-ri-

表 7 多良間方言のクラス 2 動詞(母音語幹動詞)

	拡張分節	「出る」	「覚える」
語根	母音終り	idi-	ubui-
基本語幹	-ø-	idi-ø-	ubui-ø-
l 語幹	-l-	idi-l-	ubui-l-
ru 語幹	-ru-	idi-ru-	ubui-ru-

³ その原因についてはよく判らない。これは、動詞のパラダイムによる再編集によるものなのか、それとも、C_u という音節が C_i として変化したことによるものなのかは現時点では不明である。実際に、C_{ja} よりも、C_{ju} が音節として不安定で、C_u や C_i に変化したと思われる根拠がある。

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
平成 30 年度 第1回研究発表会「動詞・形容詞(琉球諸語)」

表 8 下地皆愛方言のクラス 2 動詞

	拡張分節	「出る」	「覚える」
語根	母音・子音終わり	id-	ubui-
基本語幹	-i-	id-i-	ubui-i- [ubui]
iri 語幹	-iri-	id-iri-	ubui-iri- [ubuir]
iru 語幹	-iru-	id-iru-	ubui-iru- [ubuiru]
未然形	-u-	id-u-	ubui-u- [ubuiju]

2.1.3. 拡張語幹の機能的な対応とその歴史的な出自

拡張語幹の形式が似ていても、付く接辞が異なったりすることなどがあり、各方言の動詞の体系を正確に捉えるために、それぞれの拡張語幹の分布や語根に直接に付く接辞の形式も比較しなければならない(表 9~10)。

表 9 下地皆愛方言の動詞

機能\動詞	CL1 (-C-)	CL1 (-V-)	CL2
名詞形	kak-ŋ	niga-ŋ ~ niga-u [nigoo]	id-i
過去語幹	kak-ŋ-	niga-u- [nigoo]	id-i-
-gamata	kak-ŋ-	niga-u- [nigoo]	id-i-
終止連体形	kak-ŋ	niga-u [nigoo]	id-i
継起 -tti	kak-i-	niga-i-	id-i-
付帯 -utii	kak-i-	niga-i-	id-i-
-ba1 (弱化形)	kak-i-	niga-i-	id-iri-
-ba1	kak-i-	niga-i-	id-iru-
-ba2	kak-a-	niga-a-	id-u-
未然形	kak-a-	niga-a-	id-u-
勧誘形	kak-a	niga-a	id-u

名詞形・過去語幹: 連用形対応。終止連体形: 連用形と連体形が合流したもの。-gamata: 連体形対応。継起・付帯接辞: 接続形(「シアリ中止形」)由来。-ba1: 已然形対応。-ba2・未然形: 未然形対応。勧誘形: ?。

多良間方言では、-ba1 (後述)の付く語幹が変わっており、i 語幹ではなく、基本語幹になっている。ただし、CL2 動詞の場合は、古い -ru- 語幹も可能である。i 語幹はあるが、これは、接続形由来のものであり、完了の派生接辞 -ttar- が付く時にしか用いられない。なお、-turii/-tui の接辞は、他の方言と異なり、i 語幹ではなく、基本語幹に付く。

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
平成 30 年度 第1回研究発表会「動詞・形容詞(琉球諸語)」

表 10 多良間方言の動詞

機能\動詞	CL1 (-C-)	CL1 (-V-)	CL2
名詞形	kak-ɿ	niga-ɿ	idi-ø
過去語幹	kak-ɿ-	niga-u- [nigoo]	idi-ø-
-gumata	kak-ɿ-	niga-u- [nigoo]	idi-[- ~ idi-ø-
終始連体形	kak-ɿ	niga-u [niguu]	idi-[- ~ idi-ø
継起 -ttii	kak-i-	niga-i- [nigee]	idi-ø-
付帯 -tu(ri)i	kak-ɿ-	niga-u- [niguu]	idi-ø-
-ba1 (弱化形)	無し	無し	無し
-ba1	kak-ɿ-	niga-u- [niguu]	idi-[- ~ idi-ru-
-ba2	kak-a-	-a-	idi-ø-
未然形	kak-a-	-a-	idi-ø-
勧誘形	kak-a	niga-a	idi-ø

2.1.4. クラスの所属

方言を問わず、各動詞語彙の所属クラスは極めて安定的である。宮古語内の歴史において、クラスが変わったと示せる動詞は、bzz- 「ある」、kss- 「着る」、pss- 「干る」と uɿkss- (「追い来る」に対応、「追う、追いかける」の意)における kss- 「来る」の4つしかない(宮古語における「四段化」に関しては、名嘉真 1985 の研究があるが、融合説⁴を前提に論じられている)。ただし、kss- を除いて、宮古のデータだけでは、変化の方向が自明ではないということを強調しなければならない。

表 11 クラスが変わった動詞

方言動詞	着る	ゐる	干る	追う	(喫る)
多良間	CL2 (kii-)	CL2 (bii-)	CL2 (pii-)	?	CL1
伊良部仲地	CL2 (ttei-)	CL2 (bzzi-)	CL2 ~ CL1 (pɛɛi- ~ pss-)	CL1 (uɿtts-)	CL1
狩俣	CL2 (kɛɛi-)	CL2 (bzzi-)	CL2? (pɛɛi-)	?	CL1
平良	CL1 (kss-)	CL1 (bzz-)	CL1 (pss-)	CL1 (uɿkss-)	CL1
下地皆愛	CL1 (kss-)	CL1 (bzz-)	CL1 (pss-)	CL1 (uɿkss-)	CL1
砂川	CL1 (kss-)	CL1 (bzz-)	CL1 (pss-)	CL1 (uɿkss-)	CL1
石垣四箇	CL1	CL1	?	?	?
竹富	CL1	CL2	?	?	?
『おもろそうし』	CL2	CL2	?	?	?

? 未確認

「着る」と「座る」は、『おもろそうし』において、一段・二段動詞対応動詞の活用形を示しているほか(高橋 1991)、「見る」と同様に特殊な他動詞形を持っている(表 12)。そのため、「着る」と「座る」はクラス 2 からク

⁴ 融合説について

ラス 1 へと変わったことが判る。しかし、多良間方言の形式と、仲地・狩俣方言の形式が対応しているかどうかという問題が残っている。

表 12 「見せる」、「着せる」、「座らせる」

	「見せる」	「着せる」	「座らせる」
伊良部仲地	miei-	kuei-	biei-
平良	miei-	kiei-	biei-
皆愛	mie-	x	bie-
多良間	miei-	kiei-	biei-

x 同源の形式が得られない？ 未確認

宮古語では、*i から変化した γ が後続の *r と *j を同化させていることが周知のとおりである(つまり、*i{r, j}V > * γ {r, j}V > γ zV、表 13、Pellard 2009 pp.326-327)。宮古のほとんどすべての方言では、本来の *ij と *ir との対立が失われたわけであるが、唯一伊良部長浜方言では、語頭においてその対立が保たれている。この方言では、*#irV が # \ll V、*#ij は # γ zV として変化しているため、*ir と *ij の区別を中古宮古の段階で再建できる。

ここで重要なのは、*ije、*ire に対する多良間方言と宮古の他の方言との対応である。すなわち、多良間方言では、*ije が同化しないのに対して、*ire が同化している。他の方言では、*ije も *ire も同化している。その結果を元に「着る」と「座る」の形式を再検討すると、規則的に対応していることが判る。つまり、「着る」を *kije、「ある」を *bije のように再建することができるのである。

表 13 *ij と *ir の再建

語彙\方言	平良	多良間	仲地	長浜	竹富	与那国	祖形
「魚」	γ zu	γ zu	γ zu	γ zu	idzu	iju	*iju
「父」	γ za	γ za	γ za	γ za	i:ɕza	ija	*ija
「權」	γ zaku	γ zaku	γ zaku	γ zaku	jo:	daŋu	*ijako
「得る」	γ zi-	jui-	γ zi-	γ zi-	i:ruŋ	x	*ije-
「寒い」	peei-	pui-	peei-	peei-	pi:səŋ	ɕisan	*pije
「鎌」	γ zara	γ zara	γ zara	γ zara	inəɾjə	irara	*irara
「えな」	γ za	γ za	γ za	\ll a	?	x	*ira?
「借りる」	γ za-	?	γ za-	\ll a-	irəu	irun	*ira-
「入れる」	γ zi	γ zi	γ zi	\ll i	iriŋ, iriruŋ	irirun	*ire-
「喫る.i 語幹」	pee-i-	pss-i-	pee-i-	?	?	?	*pir-e
「切れ」	keei	kssi	ttei	?	?	?	*kire

長浜のデータは 1968、平山 1983、Shimoji 2008、Jarosz 2015。x 同源の形式が見つからない。？ 未確認。

「見る」や「煮る」という同類の動詞についても、同じ再建が可能なかもしれない。「着る」などと同じ再建を想定すると、砂川(や保良、かりまた 2009)に見られる「煮る」の形式も、「見る」の語根が長母音であるこ

ともきれいに説明できる。

表 14 *Cije の再建

語彙	多良間	仲地	狩俣	砂川	祖形
「寒い」	p <i>ii</i> -	pe <i>ei</i> -	pe <i>ei</i> -	pe <i>ei</i> -	*pije-
「着る」	k <i>ii</i> -	tt <i>ei</i> -	ke <i>ei</i> -	kss- (CL1)	*kije-
「座る」	b <i>ii</i> -	bz <i>zi</i> -	bz <i>zi</i> -	bzz- (CL1)	*bije-
「干る」	p <i>ii</i> -	pe <i>ei</i> -	?	pss- (CL1)	*pije-?
「煮る」	n <i>ii</i> -	n <i>ii</i> -	n <i>ii</i> -	nni- (CL2)	*nije-?
「見る」	m <i>ii</i> -	m <i>ii</i> -	m <i>ii</i> -	mii-	*mije-?

? 未確認

なお、「蹴る」は、『おもろそうし』で一段・二段動詞対応動詞の活用形を示しているが、宮古のすべての方言では、クラス 1 に属している。

2.1.5.a 語幹は融合形由来なのか？

いくつかの方言では、t 語根末のクラス 1 動詞は、未然形においてや、接辞が直接に語根に付くときに破擦音を示している。この特徴は宮古に限らず、八重山の方言にも見られる(表 15、石垣四箇:宮良 1995、竹富:前田 2013)。Pellard 氏は、t が a の前に破擦化するという音韻変化がほかに見られないことから、宮古語の動詞の未然形はなんらかの融合形であるということを主張している (8)(何との融合形であるかについては明記していない)。

表 15 t 語根末の動詞の活用

	基本語幹	i 語幹	a 語幹	派生形
池間西原	mats-ɣ-	mat-i-, mate-i-	mat-a- ~ mate-a-	mate-ai- (受身)
伊良部長浜	mats-ɣ-	mate-i-	mat-a- ~ mats-a-	?
伊良部仲地	mats-ɣ-	mate-i-	mat-a-	mat-ai- (受身)
狩俣	?	?	?	?
平良	mats-ɣ-	mate-i-	mat-a-	mat-ai- (受身)
来間	mats-ɣ-	mate-i-	mate-a-	mate-as- (使役)
下地皆愛	mats-ɣ-	mate-i-	mat-a-	mat-ar- (受身)
多良間	mats-ɣ-	mat-i-	mat-a-	mat-ai- (受身)
竹富	n/a	mət <i>e</i> -i-	mət-ə- ~ mət <i>s</i> -ə-	mət-əri- ~ mət <i>s</i> -əri- (受身)

? 未確認

(8) *matsɣ-a > matsa > matea

表 15 で確認できるように、破擦音が観察されるのは、「未然形」ではない。未然形の場合と語根に直接に

接辞が付く場合である。Pellard 氏はこのことを見逃しているようである("certains dialectes ont des **formes d'irr el** o  la consonne radicale des verbes en -t est affriqu e", Pellard 2009 p.338、下線は著者による)。つまり、-t- か -ts- かは、特定の形式に因るのではなく、語根末音そのものの揺れなのである。

まず、宮古語では、 γ の前に、独立の根拠で別々の音素として立てねばならない t と ts の対立が中和される。そのため、mats- γ - という形式を見ると、t なのか ts なのか全く判断できないのである。次に、已然形に対応している形式(i 語幹)が破擦音を示しているのが、宮古語の規則的な音韻変化からすると、大きな問題である(多良間や池間では、破擦音が破裂音化するという変化が起こっており、mat-i- のような形式は二次的なものであると考えられる)。なぜならば、*te という音節が規則的に ti となっているからである。しかし、i 語幹の歴史的な出自が二つあること、一つは -ba が付く形式(已然形対応形)、もう一つは接続形由来のもの(「シアリ中止形」)があるということが上に述べた通りである。接続形における語根末分節の口蓋化を説明するために、接続形の祖形を、*mat-ee ではなく、mat^j-ee というふうに想定するほかない。実際、かりまた説が正しければ、連用形の i がグライド化するということが規則的なのである。i の前で t と ts とが中和せず、また i の前で ts が口蓋化しているため、接続形が matei(i) となった時点で、既定の子音が ts であると解釈させる積極的な形式となってしまう(表 16)。

表 16 「待つ」の活用変化

段階	基本語幹	已然形	接続形	未然形	派生形	
① 接続形は連用形に*-ee が付く	mats-u, mats-i-	mat-e-	mat ^j -ee	mat-a-	mat-are-	
	ik-u, ik-i-	ik-e-	ik ^j -ee	ik-a-	ik-are-	
② ik ^j -i(i)と ik-i(i)は音声的に区別できない。接続形は語根に付く-i(i)として再解釈される。また、接続形を元に継起形・付帯形が作られ、語幹化していく。t 語根末子音の動詞は接続形が語根末分節が ts であることを積極的に示している	mats- γ - if-u-, ik- γ -	mat-i- ik-i-	mate-i(i) ik-i(i)	mat-a- ik-a-	mat-ari- ari-	ik-
③ 接続形の影響で已然形由来の形式も破擦化?	mats- γ - (if-u-) ik- γ -	mate-i ik-i	mate-i(i) ik-i(i)	mat-a- ik-a-	mat-ari- ari-	ik-
④ 語根末分節が ts と再解釈され、未然形や派生形はそれに従い変化	mats- γ - (if-u-) ik- γ -	mate-i ik-i	mate-i(i) ik-i(i)	mats-a- ik-a-	mats-a(r)i- ik-a(r)i-	

困ってある形式は基底の語根末分節が ts であることを示すもの。

Pellard 氏が正しく指摘しているように、音韻史からすると t が動詞においてのみ破擦化するというのが極めて考えにくい(破裂化が規則的に起こっている池間、友利、池間方言などを除く)。しかし、逆の指摘も成立している。破擦化した形式を示している方言の方がはるかに安定的な体系を持っていると考えられ、破擦音が破裂音化するというのもとうてい起こりがたい変化である(表 17、つまり、体系①から体系②への変化は考えにくい)⁵。

⁵ 体系①から体系②への変化を想定するならば、標準語の影響しか要因が考えられない。標準語の影響をより受け

表 17 「待つ」の活用体系

		基本語幹	i 語幹	未然形	派生形
体系①	形式	mats-ɣ-	mate-i-	mats-a-	mats-a(r)i-
	基底形の語根末分節	t, ts	ts	ts	ts
体系②	形式	mats-ɣ-	mate-i-	mat-a-	mat-a(r)i-
	基底形の語根末分節	t, ts	ts	t	t
体系③(多良間)	形式	mats-ɣ-	mat-i-	mat-a-	mat-a(r)i-
	基底形の語根末分節	t, ts	t	t	t

2.2. 動詞接辞の成立

本節では、動詞に付く様々な接辞を歴史的な観点で見えていく。順番に、勧誘と意志の諸接辞、否定の接辞と中止の諸接辞を見ていく。

2.2.1. 勧誘形・意志形 -di の成立と諸問題

宮古語諸方言の勧誘と意志の接辞は 18 とおりである(代表的な方言のみを掲載している)。まず、池間諸方言が勧誘形を失っており、勧誘の範疇を -di で表わしている。次に、どの方言でもクラス 1 動詞の場合は、-di が(共時的に)a 語幹、つまり、未然形に付くものに対して、クラス 2 動詞の場合は方言によって状況が異なる。皆愛方言のように CL2 動詞の未然形(つまり、否定接辞が付く語幹)が -u- によって特徴付けられる方言では、-di がやはり u 語幹(未然形)に付く。しかし、CL2 動詞の未然形において -u- が現れない方言では、2つの異なるパターンが観察される。多良間や平良方言では、意志の接辞が直接に CL2 動詞の語根に付くものに対して、仲地では、u が現れる(表 19)。

表 18 勧誘・意志の接辞

	勧誘 (CL2)	勧誘 (CL1)	意志	意志否定	意志 2	CL2 未然形
伊良部長浜	-u	-a	-di	-dzaan	無し	-ø-
伊良部仲地	-o	-a	-(u)di	-mma	無し	-ø-
池間西原	無し	無し	-di	-dzaan	無し	-ø-
狩俣	-u	-a	-di	-djaaran	無し	-ø-
平良	-ø	-a	-di	-djaan ~ -dzaan (~ -mbaa)	無し	-ø-
下地皆愛	-u	-a	-di	-dzaan	無し	-u-
多良間仲筋	-ø	-a	-dzŋ	-man	-nn	-ø-
中古宮古	-um	-am	HORT-di	?	?	-u-

? 未解決・祖形再建不可能

ていない、民話がたくさん集録されている明治期生まれの世代と、標準語の影響を強く受けている現在の昭和生まれの世代などを比較すれば、立証可能である。

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
平成 30 年度 第1回研究発表会「動詞・形容詞(琉球諸語)」

表 19 「書く」「出る」の否定・勧誘・意志の形式(共時的な分析で形式を掲載)

	否定 CL1	勧誘 CL1	意志 CL1	否定 CL2	勧誘 CL2	意志 CL2
仲地	kaʔ-a-n	kaʔ-a	kaʔ-a-di	idi-n	id-o	id- <u>u</u> di
下地皆愛	kak-a-n	kak-a	kak-a-di	id-u-n	id-u	id-u-di
平良	kak-a-n	kak-a	kak-a-di	idi-n	idi-∅	id _i -di
多良間	kak-a-n	kak-a	kak-a-dz _ŋ	idi-n	idi-∅	id _i -dz _ŋ

仲地方言の勧誘形は -o を示しているが、文末において母音が広くなるというのはほかの方言にもよく見られる現象であり、本来 -u であったと考えられる。以上のことから、歴史的に -di が付いたのは、未然形に現れる -a- や -u- ではなく、勧誘形であるということが判る。皆愛方言などでは、共時的に意志の接辞が否定の接辞と同じ拡張語幹(a 語幹・u 語幹)に付くという分析が可能であるが、否定接辞が付くものと -di が付くものは、その歴史的な出自が異なっているのである⁶。-di の語源については不明であるが、2つの可能性が考えられる。第一に、勧誘形に引用の接語 =tii が付いた可能性がある。勧誘形は元々 m で終わっていたということが考えられるため、t が有声子音に転じたということも説明できるかもしれない(*-am=tii > -adi)。第二に、琉球に広く見られる勧誘の感動詞 dii 「さあ」が文法化したという可能性もある。ネフスキーは di:/di という項目を立てて、それを「サ。いざ。いで。」のように記述し、その項目の中に興味深い交替を収録している(9)。ネフスキーは感動詞の dii と接辞の -di を同じ形態素として捉えていたことがうかがえる。

(9) nu:radi di: nu:ra さあ乗らう (Jarosz p.98)

続いて、意志の否定形は、多くの方言では、-di にコピュラの否定形 a(ra)-n が付いた形式に由来している。狩俣方言は、その最も忠実な形式を残している。しかし、この形式は分析的であること、つまり、文法化の履歴が浅いことと、多良間にも仲地にも見られないことと、平良方言には -mbaa もあること(ネフスキー、Jarosz p.320)などから、中古宮古語に遡らない蓋然性が極めて高い。

多良間方言の意志否定形は注意を引く(9)(10)。宮古語は、膠着語的性格が強く、形態素の境界が明瞭であり、かつ、一つの形態素が一つの範疇のみを表わしている。従って、多良間の意志否定形の形式からは、「意思」と「否定」の要素を分解することができると考えられる。共時的には、意思の接辞が未然形に付くという分析を採用しているが、上の結果からすると、歴史的には kak-adz_ŋ、kak-aman という分析の方が適切である。なお、宮古語では、否定を表すのは基本的に n (又は歯茎音の t/d)であることを考慮すると、-aman という形式を、勧誘の接辞にコピュラの否定形がついたというように分解できる(11)。これは、つまり、内部再建により、宮古語の勧誘接辞が m で終わっていたという積極的な根拠なのである。

⁶ 歴史を重視するのであれば、kak-a-n 「書く-THM-NEG」、kak-adi 「書く-VOL」という分析が望ましい。共時態を重視するのであれば、一つの a 語幹を立てて、kak-a-n 「書く-THM-NEG」、kak-a-di 「書く-THM-VOL」のように分析することが適切だと思われる。特に、このように a 語幹を立てると、未然の事態 Irrealis の接辞の。「いまだに起こっていない」という一般化が成立しているということにも注意されたい。結局、どの分析にするかは、恣意的な要素が排除できないのであろう。

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
平成 30 年度 第1回研究発表会「動詞・形容詞(琉球諸語)」

- (9) kak-a 「書く-HORT」、kak-a-dzɿŋ 「書く-THM-VOL」、kak-a-man 「書く-THM-VOL.NEG」
 (10) idi-ø 「出る-HORT」、idi-dzɿŋ 「出る-VOL」、idi-man 「出る-VOL.NEG」
 (11) -aman (CL1) < *-am a(ra)-n (CL1)

宮古語では、「いやだ」に対して、mba と mma(a) の 2 種類の発音が見られ、mba > mma という散発的な変化が起こったと推測される(表 20)。この形態素とどのように関係しているのかよく判らないが、仲地の意志否定の -mma と平良の -mba は全く同じ音韻的な対応を示しており、同源だと思われる。さらに下地皆愛方言や来間方言などに、一種の反語を表わしている -mmaa という接辞がある(12)(13)。これも仲地と平良の形式と同源であり、中古宮古語に遡るとと思われる(実際、平良方言にも意志否定以外の用法も確認できている(14))。この形式は、皆愛では、クラス 1 動詞の基本語幹や未然形に付き、歴史的に、m 語尾形や勧誘形に何かが付いてできた形式なのかもしれないが、詳細は不明である。

表 20 「いやだ」・「意志否定・反語」

	「いやだ」	意志否定・反語
伊良部長浜	mmaa	
伊良部仲地	?	-mma (意志否定)
池間西原	mba	
狩俣	mma	
平良	mba	-mba (意志否定・反語)
鏡原山中	mba	
下地皆愛	mmaa	-mmaa (反語)
多良間仲筋	mma	
中古宮古語	mba	-mba

- (12) nn natsɿ=n=na ju atsɿ+munu=u=baa ami-**mmaa**
 FIL 夏=D/L=TOP 湯.HES 熱い+もの=ACC=TOP2 浴びる-**RHET**

「(昔の風呂は)夏に暖かい水を浴びるわけがない」(下地皆愛)

- (13) nnja dzugjoo=ju=mee masagi ssɿ-**mmaa**
 FIL 授業 ACC=INC ちゃんとする-**RHET**

「(戦争中は)授業もろくにできるわけがない」(来間)

- (14) nnama=mai ari=gara=mai ss-ai-mma
今=INC ある.CVB=CMPLZ=INC 知る-POT-RHET?

「今も(この式のブレーキのハンドルが)あるのかもしれない」(平良)

-di は様々な接辞(理由、確定条件、疑問、反語、逆説など)と共起できるが、その場合、方言によって特殊な形式を示している(表 21)。まず、-di は、そのまま連体節を形成することができず、軽動詞 ss-「する」が接語化して連体節が形成される。しかし、多良間方言では、-dzɿ 1 がそのまま連体節を形成することができるため、本来、-di と =sɿ 1 が融合した形式であることが推測できる(17)。次に、ほかの形式も、-di に軽動詞 ss- の活用形が付いたものに由来していると考えられ、方言によって融合している形式が発達している。

表 21 -di の拡張活用形

	意志連体形	意志理由形	意志疑問形	意志逆説形
皆愛	-di=ssɿ 1	-ttei-ba	-tte-aa	-di=s-suga
与那覇	-di=ssɿ 1	-di=ɛɛi-ba (~ -ttei-ba)	-tte-aa	-di=s-suga
砂川	-di=ssɿ 1	-ttei-ba	-ttei-ba	-t-tsuga
多良間	-dzɿ 1	-ddzi-ba	-ddzi-ba	-d-dzuga
中古宮古語	-di=ssɿ 1	-di=ɛɛi-ba	-di=ɛɛi-ba	-di=s-suga

- (15) kuu-di=ssɿ 1 niteijoobi
来る-VOL=する 日曜日
「次の日曜日(来る日曜日)」(下地皆愛)

- (16) kuu-dzɿ 1 niteijoobi
来る-VOL 日曜日
「次の日曜日(来る日曜日)」(多良間)

- (17) *-di=sɿ 1 > -dzɿ 1 (多良間方言)

2.2.2. 接続形の諸接辞

宮古語では、日本語のテ形に**機能的**に対応している形式は主に3つ、つまり、接続形(「シアリ」中止形)、継起形と付帯形がある。継起形は、接続形に「する」のテ形 sɿ-ti が付いてできた形式だと考えられている(Pellard 2009)。伊良部と池間諸方言は継起形を持たないが、この継起形が多良間や八重山にも分布しているため、伊良部と池間で失われたと思われる。なお、多良間方言では、八重山石垣四箇方言と同様に、完了派生形 -ttar- がある(詳細な記述は宮良 1995を参照されたい)。これも、接続形に「する」が付いてできた形式だが、多良間以外の宮古の方言では全く見られない。

付帯形は、どの方言にも見られるが、その付き方が異なる。多良間方言では、-tu(ri)i という形式が直接クラス 1 動詞の基本語幹、クラス 2 動詞の語根に付く。これに対して、他の方言では、クラス 1 動詞の i 語幹、クラス 2 動詞の i 語幹・語根に -utu(ri)i、又は -utii が付く(18)(19)。これらの方言では、「いる」の付帯形が規則的な urj-uutii というものもあるが、古い u-tu(ri)i、u-tii という形式もある。そのため、多良間以外の方言では、付帯形が接続形に「いる」の付帯形がついて出来たと考えられる。なお、-tu(ri)i の部分は、tur-「取る」の接続形に対応している可能性があり、多良間方言の付帯形と、他の方言に見られる「いる」の古い付帯形は、連用形を元に作られた動詞複合語に由来しているであろう。

表 22 接続諸形

	接続形 (CL1)	継起形	完了形	付帯形	テ形	条件形
伊良部長浜	-i(i)	無し	無し	-utui	無し	-tigaa
池間西原	-i(i)	無し	無し	-utui	無し	-tigaa
狩俣	-i	-citi	無し	?	-ti (神歌)	-digaa
平良	-i(i)	-tti	無し	-utii	無し	-tsɿkaa ~ -tsɿkaraa
下地皆愛	-i	-tti	無し	-utii	無し	-kkaa
多良間	-ii	-ttii	-ttar-	-tui ~ -turii	-ti (神歌)	-takaa ~ -takaraa (古くは-tika(ra)a)
中古宮古	-ii	-sɿti	-sɿ-tar-?	-turii	-ti	-tVkaraa

(18) 多良間仲筋

- a) bu-tu(ri)i 「いる-BACK」
- b) a-tu(ri)i 「ある-BACK」
- c) budu[-tu(ri)i 「踊る-BACK」
- d) uri-tu(ri)i 「降りる-BACK」

(19) 下地皆愛

- a) u-tii 「いる-BACK」 ~ ur-j-uutii 「いる-THM-BACK」
- b) ar-j-uutii 「ある-THM-BACK」
- c) budur-j-uutii 「踊る-THM-BACK」
- d) ur-j-uutii 「降りる-THM-BACK」

現代の宮古語では、日本語や北琉球のテ形と同源の形式が見当たらない。しかし、狩俣や多良間の古謡においては、テ形に、音韻的にも機能的にも対応している -ti という形式がある。多良間の古謡の例を挙げる(20)(21)。本題から少し離れるが、ここで注意しなければならないのは、これらの古謡では、接続形も用いられており、テ形とは別の形式を示しているということである。つまり、これは、宮古語の接続形がテ形由来という説を根本的に否定する根拠の一つである。なお、多良間に伝わっている「かでいかり^ろぬに^り」という歌だけでは、-ti が 9 つの異なる動詞と共に起している。この事実から、その歌の歌詞が成立した時期に、この形式がいまだにある程度の生産性を持っていたと推測できる。従って、中古宮古語の段階において再建されるべき形式だと考える(ただし、CL2 動詞に付く例しか見つかっていない)。

(20) nis₁=nu pama uri-**ti**

北=GEN 浜 降りる-**te** 形

「北の浜に下りて」(多良間、かでいかり[°]ぬにリ[°]、杉本 1994 p.65)

(21) tii=ja ts₁ki-**ti** ugam-ii

手=STAT 付ける-**te** 形 礼拝する-CVB

「手を(地面に)付けて(琉球国王を)礼拝した」(多良間、とうゆめぬにリ[°]、調査ノート)

宮古語の条件形もテ形と関連している。条件形は、方言によって様々な形式を示しているが、多くの方言では、-tVkaa と -tVkaraa の揺れが観察されている(平良、友利、多良間方言など)。条件系は、-tVkaraa という形式に遡るに違いない。また、この形式は、どの方言でも、「条件」という範疇を表わしえるが、大神方言について記述されているように(Pellard 2009 pp.230-231)、元々単に「antériorité (時間的に先に立つ)」という範疇を表わしていたと考えられる。実際、古謡における例は、「条件」ではなく、「antériorité」を表わしている。『雍正旧期』(18 世紀前半成立)の例を挙げる(22)。結局、この形式は、『おもろそうし』に見られる「てからは」に、音韻的にも機能的にも対応しており、動詞のテ形に =kara とそれに主題の助詞が付いた形式に由来している。

(22) あんせてやむすてから... 渡地ハ積あけ

ancii=djam s₁-**tikaraa** bata₁+dz₁=ba ts₁mj+agi

そのように=EMPH する-**ANT** 渡り+土地=STAT 積む+上げる.CVB

「そのようにしてからすぐ[...]渡り地(=橋)を積み上げて」(四島の親橋積立あやこ)

3. 形容語根

形容語根を元に様々な形式が形成される。それぞれの形式の分布と性質は表 23 と 24 の通りである。

表 23 形容語根諸形形式

	複合語化	-sa	-sa ar-	-ku	-ku ar-	重複形	-ttca	拡張形	ADJZ
伊良部長浜	A+N	-sa	無し	-fu	-kar-	A.LEN~A	?	A.LEN	無し
伊良部長浜	A+N	-sa	無し	-fu	-kar-	A.LEN~A	?	?	無し
池間西原	A+N	-sa	無し	-fu	-kar-	無し	-ttca	?	無し
平良	A+N	-sa	(-sa ar-?)	-fu	-kar-	A.LEN~A	-ttca	?	無し
下地皆愛	A+N	-sa	無し	-fu	-kar-	A.LEN~A	-ttca	(A.LEN?)	A.LEN-nu
多良間	A+N	-ca	-caal	無し?	無し	A.LEN~A	(-tca)	?	無し
中古宮古	A+N	-sa	?	-k _u	?	A.LEN~A	-ttca	?	x

? 未確認・祖語再建形不明 x 祖語に遡らない

表 24 形容語根諸形の特徴

形式	品詞	名詞修飾	叙述用法
複合語化	語根	A+N	A+munu, そのまま
-sa	名詞(・副詞)	(A-sa+N)	ar-
-ku	副詞	ar-	ar-
重複形	副詞(・名詞)	=nu	ur- ~ COP文
-ttca	副詞	=nu	ur-
拡張形	=tii 副詞	=tii=nu	=tii ur-
ADJZ	形容詞	そのまま	そのまま

多良間方言の形容詞は、名詞形・副詞形・感嘆形を形成する -sa に、存在動詞 ar- が続いて活用する。これに対して、宮古のほかの方言では、-sa ar- という形式がなく、副詞形を形成する *-ku に、存在動詞 ar- が融合している -kar- という形式があることがよく知られている(23)(24)。*-kar-* は、多良間を除いた宮古語の改新という説がある(Pellard 2009)。

- (23) ku[=ga=du upu-ea=a]
これ=NOM=FOC 大きい-NMLZ=ある
「こっちの方が大きい」(多良間仲筋)

- (24) kui=ga=du upu-kaa
これ=NOM=FOC 大きい-VRB
「こっちの方が大きい」(下地皆愛)

形容語根は、基本的に拘束形態素であり、叙述的に機能するために、munu と複合語を形成しなければならない(25)。しかし、すべての形容語根が拘束形態素であるわけではない。例えば、umucei 「面白い」、eeana 「汚い」や -gi 派生形などは、そのまま叙述的に用いられることが可能である(26)。

- (25) vva=ga samj=aa ara+munu
君=GEN 疥癬=TOP 粗い+もの
「君(カエル)のぶつぶは粗い」(平良)

- (26) tarama=a nama=a umucei=doo
多良間=TOP 今=TOP 面白い=SFP
「多良間島は今は面白いよ」(多良間仲筋)

3.1. 重複形

重複形は、池間諸方言を除いた方言に見られる。八重山にも重複形があるので、池間諸方言において、重複形が失われていったと考えられる。この形式は、副詞用法、修飾用法、叙述用法を持つ (27)(28)(29)。特に叙述用法においては、方言の差が見られる。例えば、平良方言と異なり、下地皆愛方言では、通常、重複形をそのまま叙述的に用いない(30)。さらに、平良方言には、「重複形 COP」、「重複形 ur-」の両方の構文が見られるが、その選択が形容の対象の有生性によるようである。皆愛方言においては、そのような区別が見られず、もっぱら「重複形 ur-」という構文が用いられる。

(27) pɿguroo~pɿguru sue=uu-taa

RED~冷たい 痙攣する=IPF-PST

「(死体が)冷たく固まっていた」(副詞用法、平良)

(28) koo~koo=nu jaa

RED~貧しい家

「貧しい家庭」(修飾用法、平良)

(29) sɿdaasɿ~sɿdaasɿ

RED~涼しい

「涼しい」(叙述用法、平良)

(30) sɿdaasɿ~sɿdaasɿ=du uu

RED~涼しい=FOC いる

「涼しい」(叙述用法、下地皆愛)

(31) nuzzuu=nu naga~naga yaa-ba

RED~知る.CVB=GEN LRED~naga COP-CSL

「まさに伊良部っばい顔」(平良)

(32) tunaɿ=nu ffa-nukjaa=yuɿsa=mai upoo~upu u-taa=ttsa

隣=GEN 子-PL=より=INC LRED~大きいいる-PST=HS

「隣の子どもたちよりも大きかったそうだ」(平良)

- (33) nts^w=aa nkjaan=na nnja akaa~aka uu-kkaa
味噌=TOP 昔=TOP FIL LRED~赤いいる-COND
「味噌は昔は、赤いと」(下地皆愛)

最後に、重複形は派生形であることを強調しなければならない。重複形が形成できるのは、あくまで意味的な基準によっているのであり、形容語根のみをインプットとしているわけではない。つまり、その品詞にも関わらず、どの語根を元にしても、その語根が表わしている対象を性質として捉えられるならば、重複形を形成することが可能である。例えば、どの地名からも、重複形を生産的に形成することができる(34)。また、動詞からでも、重複形が形成される例もある(35)。特に(35)における重複形のインプットが動詞の屈折形であることに注意されたい。

- (34) iravv~irav=nu mipana
RED~伊良部=GEN 顔
「まさに伊良部っぽい顔」(下地皆愛)

- (35) eei~eei=nu pstu
RED~知る.CVB=GEN 人
「まさに伊良部っぽい顔」(下地皆愛)

3.2. -ttea

副詞形を形成する -ttea という形態素が広く見られるが、どの方言でも完全に生産的でないようである(つまり、どの形容詞の語根を元に副詞形を形成できるわけではない)。これは、=nu を経て、名詞を修飾することも、ur- を経て叙述的に使われることもできる⁷。

- (36) sentaku+munu=u=baa kagii-ttea arai-tti
洗濯+物=ACC=TOP きれい-ADV 洗う-SEQ
「洗濯物をきれいに洗ってから」(副詞用法、平良)

- (37) kagii-ttea=nu fuku
きれい-ADV=GEN 服
「きれいな服」(修飾用法、平良)

⁷ =nu を経た名詞修飾用法と、ur- を用いた叙述用法は、明らかに副詞用法の拡張である。

- (38) kɿmu=nu kagii-ttea uɿ-sɿkaa
心=NOM きれい-ADV いる-COND
「心がきれいであれば」(叙述用法、平良)

3.3. 形容詞派生接辞 -Vnu

下地地域を中心に⁸、形容詞の拡張された語根に -nu が付いた形式が見られる。この形式は、限られた地域にしか分布していないため、この地域に起こった改新だと思われる。この形式は、そのまま名詞を修飾することも、叙述的に機能することもできる。この振る舞いは、他のどの語類とは異なっており、この形式を方言は、典型的な「形容詞」語類を発展させたと言える。

- (39) kagi-inu jaa
きれい-ADJZ 家
「きれいな家」(修飾用法、下地皆愛)

- (40) unu jaa=ja kagi-inu
その 家=TOP きれい-ADJZ
「その家はきれいだ」(修飾用法、下地皆愛)

3.4. 拡張形

伊良部長浜では、形容語根を生産的に拡張させて、=ti=nu を経て名詞を修飾することが可能である(41)。この形式は、感嘆的な引用として働くとされる("The semantic effect of this is a quoted exclamation" Shimoji 2008 p.338)。下地皆愛や砂川では、この構文が使えない。ほかの方言でも形容語根をその構文で使えるかどうか不明であるが、擬態語・擬音語の例がある(42)。

- (41) takaa=ti=nu pstu
高い.LEN=QUOT=GEN 人
「a man who is like, "(how) tall!"」(伊良部長浜、Shimoji 2008 p.340)

- (42) puruu=ti-gama=a eii
EXPLEN=QUOT-DIM=STAT する.CVB
「ほどよくプルーにして」(平良)

⁸ 砂川方言でも、taka-anu pstu が許容されたが、どのぐらい生産的かは不明である。

3.5. -kar- の情報構造上の特徴について

-kar- は、*-ku と存在動詞の融合した形式であることをすでに述べた。しかし、共時的に見ると、-kar- と -fu ar- が完全に相補的な分布を成していることに注意しなければならない。つまり、-kar- と -fu ar- は、同じパラダイムの異形態にすぎないのである(下地 2018 もこの分析を採用している)。異形態の現れ方に関しては、次の一般化ができる(43)。形式的には、-kar- が融合しているが、機能的には「ADV.ある」というふうに分析することが可能である。

(43) 副助詞があれば、-fu ar- が、それ以外の場合は -kar- が用いられる。

(44) -kar- と -fu ar- の分布(下地皆愛)

a) upu-kar- 「大きい-VRB」

b) upu-f=fa ar- 「大きい-ADV=TOP ある」

c) upu-fu=du ar- 「大きい-ADV=FOC ある」

d) upu-fu=mai ar- 「大きい-ADV=INC ある」

e) upu-f=fatsɿm=mai ar- 「大きい-ADV=EMPH=INC ある」

上の例で確認できるように(44)c)、焦点の助詞 =du を形容詞に付けることが可能である。宮古語では、どのような焦点でも(文焦点、項焦点など)、基本的に、主文において焦点範囲の開始位置を表す助詞 =du を付ける(詳細は林 2017)。例えば、動詞述語文の場合は、焦点範囲の開始位置がどこにあっても、その句の後ろに =du を付けるのが普通である(45)(46)。

(45) [koos=su=du foo-taa]_{FOC}

菓子=ACC=FOC 食べる-PST

「お菓子を食べた」(下地皆愛)

(46) koos=su=baa [foo=du=sɿ-taa]_{FOC}

菓子=ACC=TOP 食べる=FOC=する-PST

「お菓子は食べた」(項を除いた述語焦点、皆愛)

しかし、形容詞の焦点形(A-fu=du ar-)が形成できるのにも関わらず、動詞の焦点形(V=du ss-)とは異なる振る舞いを示しているようである。つまり、形容詞述語文(「X は形容詞だ」)では、動詞述語文から考えると、述語が焦点である場合に形容詞の焦点形が期待されるが、実際には別の形式が用いられる(方言により複数のバリエーションがある)。形容詞の焦点形(A-fu=du ar-)が使われる場合には、単に焦点であるだけでなく、特殊な意味が加わるようである。形容詞述語における =du と動詞述語における =du は、異なる機能を持っている可能性があるということである(この点に関しては、コンピュータ文も形容詞文とよく似ている)。

(47) kjuu=ja atsɿ+munu
今日=TOP 暑い+もの
「今日は暑い」(下地皆愛)

(48) kjuu=ja atsɿ+ɿnu
今日=TOP 暑い-ADJZ
「今日は暑い」(下地皆愛)

(49) kjuu=ja atsɿɿ~atsɿ=du uu
今日=TOP RED~暑い=FOC いる
「今日は(とても)暑い」(下地皆愛)

(50) kjuu=ja atsɿ-fu=du aa
今日=TOP 暑い-ADV=FOC ある
「今日は(昨日より)暑い」(下地皆愛)

なお、Koloskova & Ohori 2008 では、形容詞述語文において =du が項側にあれば述語は -kar- となり、なければ munu 形となるとしているが、発表者の観察では、項側に =du があっても、munu 形が使える(51)。またその反対も成立している(52)。

(51) kui=ga=du upu+munu
これ=NOM=FOC 大きい+もの
「こっちの方が大きい」(下地皆愛)

(52) kuma=nu sɿdaasɿ-kaa
これ=NOM 涼しい-VRB
「こっちが涼しい」(下地皆愛)

3.6. 下地皆愛方言の形容詞体系とその問題

下地皆愛方言は、他の方言に比べてやや複雑な形容詞の体系を示している。例えば、「おなかがすいている」という叙述文に対して、少なくとも 6 通りの言い方が可能である。それぞれの言い方の詳細な意味の差については、今のところ不明な点が多く残っている。ただし、munu 形は 2 人称・3 人称の精神・身体的な状態の場合において使用できないことが確認できている。

(53) 形容詞叙述諸形

- a) jaasɿ+munu 「ひもじい+もの」 munu 形
- b) jaasɿ-ɿnu 「ひもじい-ADJZ」 形容詞化派生接辞形
- c) jaasɿ~jaasɿ(=du) uu 「RED~ひもじい(=FOC) AUX」 重複形
- d) jaasɿ-ccha(=du) uu 「ひもじい-ADV2(=FOC) AUX」 -ccha 形
- e) jaasɿ-fu=du=aa 「ひもじい-ADV=FOC=AUX」 -fu ar-/-kar- 形
- f) ati=du jaasɿ-kaa 「とても=FOC ひもじい-VRB」 -fu ar-/-kar- 形

略号

ACC Accusative ADJZ Adjectivizer ADV Adverbializer ANT Anteriority AUX Auxiliary BACK Background
COP Copula CSL Causal CVB Converb EMPH Emphatic FIL Filler FOC Focus GEN Genitive HES Hesitation
HON Honorific HORT Hortative INC Inclusive IMP Imperative IPF Imperfective LEN Lengthening NEG
Negative NMLZ Nominalizer NOM Nominative PASS Passive POT Potentialis PST Past RED Reduplication
RHET Rhetorical SEQ Sequential SFP Sentence Final Particle STAT Stative THM Thematic TOP Topic VOL
Volitional VRB Verbalizer

参考文献

- 池間苗(2003)『与那国語辞典』私家版。
- 伊豆山敦子(2002)「琉球・八重山(石垣宮良)方言の文法」真田真治(編)『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究』大阪学院大学情報学部
- かりまたしげひさ(2009)「宮古島市城辺保良方言の動詞の終止形」高江洲頼子(代)『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』沖縄大学人文学部 1-28
- かりまたしげひさ(2009)「宮古島市城辺保良方言の動詞の連用形、連体形、条件形」高江洲頼子(代)『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』沖縄大学人文学部 29-60
- かりまたしげひさ(2009)「宮古島市城辺保良方言の動詞の形づくり」高江洲頼子(代)『琉球語諸方言の動詞、形容詞の形態論に関する調査・研究』沖縄大学人文学部 61-85
- 佐渡山正吉(2014)『狩俣方言の世界』私家版
- 杉村孝夫(2003)『来間島方言の記述的研究』研究成果報告書
- セリックケナン(2018)「南琉球宮古語下地皆愛方言一簡略記述・談話資料・語彙集一」『言語記述論集』10:97-249
- 高橋俊三(1991)『おもろそうしの動詞の研究』武蔵野書院
- 富浜定吉(2013)『宮古伊良部方言辞典』沖縄タイムス社
- 林由華(2013)『南琉球宮古語池間方言の文法』京都大学文学研究科博士論文
- 林由華(2017)「南琉球宮古語池間西原方言における du 焦点構文と述語焦点形」『阪大社会言語学研究ノート』第15号大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室 87-99
- 平山輝男(編)(1983)『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社
- 前田透(2011)『竹富方言辞典』南山舎

「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
平成 30 年度 第1回研究発表会「動詞・形容詞(琉球諸語)」

宮良信詳(1995)『南琉球八重山石垣方言の文法』くろしお出版

本永守靖 (1973)「平良方言の動詞の活用」『琉球大学教育学部紀要 第一部』17, 27-41

Jarosz, A. (2015) Nikolay Nevskiy's Miyakoan dictionary: reconstruction from the manuscript and its ethnolinguistic analysis. Adam Mickiewicz University.

Koloskova, Y., Ohori, T. (2008). Pragmatic factors in the development of a switch-adjective language: A case study of the Miyako-Hirara dialect of Ryukyuan. *Studies in Language*. Volume 32, Issue 3, 610 –636.

Pellard, T. (2009). Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū. *Linguistique*. Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales (EHESS).

Shimoji, M. (2008). *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. Australian National University.

Shimoji, M. (2018) *A Grammar of Irabu, A Southern Ryukyuan Language*. Kyushu University Press.